

## アメリカ黒人の呼称について

藤 本 規 夫

Designations of American Blacks

Norio Fujimoto

アメリカ黒人に対する呼称は差別的な蔑称を含めて多くあるが、それらの呼称をみれば、彼らが他者（特に多数派）からどのようにみられていたか、あるいはみられているかを理解する材料になる。また、場合によっては、差別的かどうかにかかわらず他者が勝手に決めた呼称を嫌って、自分たちの呼称を自分たちで選ぶこともあるが、その過程を検証することにより、その集団の置かれている立場・状況と彼らの集団としての思想を理解する手がかりを得ることもできる。なぜなら、言葉は単なる記号ではなく、人の概念とか考え方を表わし、さらにはその言葉を使う人が住む社会がどのような価値基準を持っているかも反映するからである。

皮膚の色に基づく差別が行われている社会においては、色に関係した言葉が蔑称として使われるのはごく自然であり、黒人の蔑称はその典型である。なお、民族的（人種的）蔑称一般は英語で *ethnic slur*, *racial slur*, *racial epithet* と表現されることが多い。

小論は黒人に対する呼称の変遷を歴史的にたどることにより、黒人および黒人を取り巻く問題についての理解を深める一助にすることが目的である。

### I

まず、主要な黒人呼称の起源と意味を Geneva Smitherman の *Talkin and Testifyin, The Language of Black America*<sup>1)</sup> を参考にしながら整理してみたい。

14世紀の終り頃に最初にアフリカ黒人を奴隷貿易の対象にしたのはポルトガル人だが、彼らは自分たちが獲得した“物件”をポルトガル語で黒という意味の *negro* と呼んだ。ポルトガル人に続いて奴隷貿易を行ったスペイン人も、捕獲したアフリカ黒人をスペイン語で同じく黒を意味する *negro* と呼んだ。それは、ヨーロッパの白人が、アフリカ黒人のアフリカ的な部分 (*African-ness*) より、色が黒いという点 (*blackness*) に強烈な印象を受けたからであろう。そして、新大陸へ奴隷が連れてこられるようになると、イギリス人もこの語を取り入れた。

植民地時代のアメリカ (*Colonial America*) では、白人は黒人のことを *negro*, *slave*, *nigger* と呼んでいた。これら三種類の呼称はほとんど同義語として使われた。*negro* と *nigger* も、特に南部の白人に間では同じ意味で使われており区別はなかった。この頃は名詞としての *negro* には (*nigger* も同じだが) 小文字が用いられていたが、これは白人の人種差別主義 (*white racism*) が理由というより、ポルトガル語やスペイン語の *negro* が形容詞だからである。白人が *negro* と *nigger* を区別し、*nigger* が人種差別語となったのは20世紀に入ってからである。

植民地時代の奴隷は祖国アフリカへの郷愁から自分たちのことを *African* と呼ぶことが一般的だった。1794年に設立された最初の黒人教会は *the African Episcopal Church* と名付けられた。しかし、19世紀になると白人が中心となって進めていたアフリカへの黒人送還運動への抵抗感

と黒人自身の心の内部に高まりつつあったアフリカとの文化的距離感が、African という語の意義を薄れさせて行った。その頃になると、もともと白人が使い始めた言葉である negro を黒人も使うようになってきた。しかし、自分たちの言葉でないということからこれを嫌った黒人も多かったらしく、以前にもある程度使われたことのある colored という語が再浮上してきた。そして20世紀の始めまで colored が黒人の間で最も好まれていた。急進的な黒人運動家たちが1909年に設立した NAACP (National Association for the Advancement of Colored People) はその名前に colored を使っている。

ところが、黒人の指導者が、黒人と白人との融合を強力に推進していた1920年から1955年頃には、黒人側が negro という語の使用に屈服した形となっていった。それは、白人は negro に慣れ親しんでいるため colored という語に切り替えるつもりはないらしい、と黒人側が考えて降参したのである。そして1920年代には、黒人指導者が negro という語に威厳と敬意 (dignity and respect) を与えるために、大文字化 (capitalization) を進める運動を始めた。NAACP は白人の出版社や編集者に700通の手紙を送りつけた。これが奏功して、1930年3月7日にニューヨーク・タイムズ紙が次の発表を行った。“In our Style Book, Negro is now added to the list of words to be capitalized. It is not merely a typographical change, it is an act in recognition of racial self-respect for those who have been for generations in the ‘lower case.’” そうした動きにも拘わらず、Negro に対する抵抗は強く、colored も相変わらず使われ続けた。年配の黒人は今でも Negro より colored を好む傾向がある。要するに Negro は黒人の間で完全に受け入れられた訳ではなかったのである。

1960年代のブラック・パワー運動 (black power movement) では、black を Negro の代わりに意識的に使い始めた。black が侮蔑的でなく、だだの中立的な語として使われた証拠はあるが、伝統的には悪態語 (name-calling word) であった。特に南北戦争時代から1966年に Stokely Carmichael が “black power”<sup>2)</sup> を唱えるまでは、黒い肌は否定的に見られていた。黒いことは美しくないと考えられていた昔を思い出して、black と呼ばれるとたじろぐ年配の黒人が今だにいる。1960年代のブラック・パワー運動は、黒人の権利を主張するだけでなく、自分たちの呼び名を自分たちで選ぶことでもあった。彼らを選んだ black という語は、白い肌の色や白人の価値観はもはや重要でないことを認識し、黒人の頭の中から白人の考えや価値基準を取り除くために必要であった。こうして、Negro に代わって black が white の対語となった。1966年には black と同時に Afro-American や African-American という呼び名も現われてきた<sup>3)</sup>。

## II

*Talkin and Testifyin, The Language of Black America* は1977年に発行されており、最近の状況を反映していないので、その後の動きと一部の呼称について補足をしたい。

まず、米国の国勢調査では、1790年の第1回以降、1950年の第17回まで、黒人は Negro (ときには Colored) と記されていた。1960年の第18回の調査用紙にはまだ Negro という語が用いられているが、70年には Negro or Black が、80年、90年には Black or Negro と記されている。なお、商務省国勢調査局発行の「米国統計年鑑」(U.S. Bureau of the Census, *Statistical Abstract of the United States*) の人種別表では、1976年度版までは全部 Negro という語が、77年度以降はすべて Black という語が使用されている<sup>4)</sup>。

次に nigger であるが、この語の語源をラテン語の niger (黒色の意味) に求める説が有力な

ようである。特に差別的な意味合いで多く使われるようになったのは、上掲書では20世紀になってからとしているが、*Historical Dictionary of American Slang* (Random House, 1997) は1775年に蔑称として使われた例を挙げている (F. Moore, *Songs of Amer. Revolution* 101: And here and there a nigger.)。なお、Clarence Major の *JUBA to JIVE, A Dictionary of African-American Slang* (Penguin Books, 1994) では、nigger が黒人に対する白人側からの差別語になったのは、南北戦争 (1861-65) 後としており、語源としては次の諸説を挙げている。1) nick が語源。nig は nick の変形。“Niggler” clips and files gold coins; “niggling” is cutting awkwardly. 2) アイルランド語の方言である negar が語源 (1587年頃)。スペイン語の negro の発音に近いところから。17世紀までに negar は negro の発音の変形として広く使われるようになった<sup>5)</sup>。3) フランス語の negre が語源。

いずれにしても、黒人に対する最も差別的、侮蔑的な言葉はこの nigger である。この呼称は「黒人抑圧のシンボルであり、最もきつい、もっとも永続的な語である」<sup>6)</sup>。「黒人をいとも簡単に屈辱にさらすには、この単語で十分である」「白人がこの言葉を口にする、それは研ぎ澄まされた刃物になる。あきらめの気持ちで聞いたり、『たんなる言葉』ではないかと無視できる黒人は誰一人としていない」「この言葉にははなはだしく卑しい、墮落した生き物という意味が込められており、そう呼ばれる人は、下等な人類であるとみなされている。奴隷制を正当化するにも、そうした言葉が必要だった。今日では、黒人の分離と従属を合理化するのに、この言葉は使われている」「白人によれば、『ニガー』とは黒人の貪欲、怠惰、愚鈍、不潔などを意味するが、実際は、白人のなかにもこれらは存在するのだ」「文明の模範である白人は『ニガー的なもの』が自分たちの存在にふくまれることを許さない」「白人は、黒人だけにその汚れを押し付け、自分たちはきれいでいられると考えたわけだ」<sup>7)</sup>。

1995年の O. J. Simpson の刑事裁判の際に、事件を担当した白人の刑事は人種差別主義者 (racist) であるから証言は信用できないと弁護側が強硬に非難し、それが陪審員の無罪裁定に大きく影響したことが知られている。この刑事が人種差別主義者であると弁護側は決めつけた根拠は、彼が、過去10年間 nigger という言葉を使ったことがないと証言していたにもかかわらず、実際にその言葉を使っている会話の録音テープがでてきたからである。弁護側はこの言葉一つで同事件を人種差別事件にすり替えることに成功し、無罪裁定に持ち込む有力な材料として利用した訳である。イトー判事はこの言葉 (epithet) について、“the single most insulting, inflammatory and provocative term...in modern-day America.”<sup>8)</sup>と語っている。

しかし、この語が差別的、侮蔑的な意味を持つのは、白人が黒人に対して使うときであり、黒人同士の間では親しみを込めてお互いを呼び合うのに使われているのが興味深い。

今度は black から African-American への変化を追ってみたい。1988年12月、黒人団体の指導者たちがシカゴに集まった席上、Jesse Jackson が、エスニック・アイデンティティを明らかにするために、自分たちのことを black ではなく African-American と呼ぼうと提案してから、black から African-American への転換が起こったとされている。その背景には、Jackson の家族7人の肌の色がそれぞれ違うように、black は黒人の人種の特徴を正しく伝えていないこと、さらには、民族的な誇りが持てるような呼称が必要である、という主張がある<sup>9)</sup>。Shelby Steele は、このように新しい呼称を使って誇りを自覚するという行為の背景には、公民権運動 (civil rights movement) の結果黒人が社会進出を果たしても、結局は黒人の誇りが満たされなかったという現実がある、と分析している。しかし、祖先の故郷であるアフリカの過去の栄光を賛え、望郷の念を表そうとするこの新しい名称は、「誤った方法で人種の懐疑を解消しよ

うとする行為に過ぎず、我々自身の過去から目を背けようとする行為でしかない。その意味では、この名称は人種的懐疑を隠蔽する比喩的な名前に過ぎない」と批判し、blackの方については、「1960年代に黒人という名称が好まれたのは、劣等感の否認ではなく、劣等感と正面对決しようとしたからだった。つまり、もともと黒人という名称には、自己を誠実に受け入れるという意味があった」「この呼称は、我々の恥や疑いを率直に表明し、自分自身（さらには他者を）受け入れるために役立ったからである」と述べている<sup>10)</sup>。

一方で、African-American は文字通りには祖先がアフリカ出身のアメリカ人すべてであり、非黒人（モロッコ人、アルジェリア人、南アフリカの白人等）も含まれるはずなので、黒人と同義語として使うのはおかしいとする指摘もある。

いずれにしても、黒人が自分たちのことを呼ぶ名前として最初に使ったのが African であり、その後数世紀を経て African (-American) に戻ってきた訳である。植民地時代には、祖国への郷愁から African と呼んだが、現在 African-American と呼ぶのは、白人社会 (White America) に完全には受け入れられない自分たちの誇りを取り戻すためであり、またハイフンなしの American になり切れない苛立ちの表われでもある。

ところで、一般の黒人たちは自分をどのように呼んで欲しいと思っているのだろうか。合衆国労働省 (the Labor Department) が1995年に行った調査の結果によると、

Black 44.2%, African-American 28.1, Afro-American 12.1,  
 Negro 3.3, Colored 1.1, Some other term 2.2, No preference 9.1  
 (the Labor Department, *U.S. News & World Report*, 1995/11/20)

となっている。また、それ以前の他の調査結果と比較すると次のように変化がみとれる<sup>11)</sup>。

	1968年	1990年	1995年
African-American		15 %	28 %
Black	6 %	72	44
Afro-American	15		12
Negro	69	2	3

これらの調査は実施機関、実施対象が同じでないため、正確な時系列での比較はできないが、おおまかな傾向を知る上での意味はあろう。ここで特に興味深いのは、ブラック・パワー運動や PC 運動<sup>12)</sup> が進んだ結果、現在では黒人の最も一般的な呼称は African-American であると信じられている風潮のなかで、black と呼んで欲しいと考える黒人が意外に多いことである。

では、negro が Negro と大文字化したように、black は Black になったのだろうか。集団の名前を大文字化することは敬意の表われであるから、Negro の場合と同じように black の大文字化を進めようとする動きもあったが、一般のマスメディア (例: *NEWSWEEK*, *TIME*) では小文字の black を white と対称的に用いる場合が多いようである。しかし、「人種問題への感受性の鋭さを見せたがっている一部のジャーナリストや学術的な著作者・編集者は、大文字の Black と小文字の white を使っている」。また「白人が大文字の Black を使うのは自己満足めているし、黒人がそうするのは『自己顕示的』である」<sup>13)</sup> との見方もある。

*The American Heritage Dictionary of the English Language Third Edition* (Houghton Mifflin

Company, 1992) で “black” を引くと USAGE NOTE の欄に詳しい記述があるが、要約すると、

1. Black は人を意味する際に、大文字が使われることが多いが、小文字の black も広く使われている。

2. 大文字の Black は、Italian とか Sioux といった他の民族、国民と同等に扱うという利点がある。

3. Black はもともと形容詞なので、上の例にある他の語と違うとする議論もあるが、the Reds and Whites (of the Russian Civil War) や the Greens (the European political party) の例がある。

4. Black の大文字化は、white との関連で問題が生じる。Black と White を並列することが統一性という観点から必要になるが、White と大文字化すると、White が一つのまとまった民族集団を形成している意味にもなり議論の余地がある。

5. 一方、同じ文脈の中で、Black は大文字、white は小文字とすると、なぜそんな区別をする必要があるのかということが問題となる。

6. 要するに、満足な解決法はないわけで、white をどう扱ってよいか分からないために大文字の Black の使用を思いとどまっている向きが多いのではないだろうか。

小論で参考にしたアメリカ人による著書がどのように扱っているかをみると次の通りである。

Vincent N. Parrillo (白人) の *DIVERSITY IN AMERICA* では、Black Americans, White Americans, Blacks, Whites, Black and White females のように両者を大文字化している。Andrew Hacker (白人) の *TWO NATIONS*, Shelby Steele (黒人) の *The Content of Our Character*, Geneva Smitherman (黒人) の *TALKIN AND TESTIFYIN, The Language of Black America*, Arthur M. Schlesinger, Jr. (白人) の *The DISUNITING OF AMERICA* では、black Americans, white Americans, blacks, whites, white and black parents のようにすべて小文字で統一している。

なお、黒人雑誌の *emerge* は、Black children, White officer, Blacks と大文字で統一しているが、オハイオ州立ケント大学 (Kent State University) の黒人学友会の機関誌 *UHURU* は、記事によって Blacks, Black teachers と大文字を使ったり、black students, white students のように小文字を使ったりしており不統一である。同大学の日刊紙 *Daily Kent Stater* は blacks, black man, black or white のように小文字で統一している。

最後に person of color; people of color という表現に触れておきたい。これは比較的新しい用法だが、PC 運動から出てきた “people first” の原則<sup>14)</sup> に従って colored person, colored people の person, people を前にもってきたものと考えられる。しかし、colored person, colored people が文字通りの一般的な「有色人種」より、特定の「黒人」を意味することの方が多かったのに対し、person of color と people of color は、逆に「黒人」よりも「有色人種」あるいは「少数民族」を指す表現として用いられる。いわゆる少数民族を意味する英語は minorities だが、アメリカの地方によっては、少数民族が白人人口を上回ることもあるので、言葉と実態が一致していない場合もある。従って、この理由から people of color を minorities の代替語として使う人も多い<sup>15)</sup>。なお、この表現を白人が使う場合は一般的に「尊敬」を意味する<sup>16)</sup>。

### III

これまで主要な黒人呼称を取り上げてきたが、小論では触れられなかったその他の黒人呼称

を、すでに使われていないものも含めて次に記しておく。

人名に関連するもの：Aunt Jemima, Aunt Tom, Cuffee (Cuffy), George, Jim Crow, Juba, Liza (Lizzie), Old Black Joe, Peola, Rastus, Sambo, Sapphire, Uncle Tom

動物に関連するもの：blackbird, coon, crow, jungle bunny, seal

食べ物の色に関連するもの：brown sugar (sugar brown), buckwheat, chocolate, chokker, chokko, licorice, molonjohn, oreo, raisin mocha

その他：boy, charcoal, coal, darkie (darky), Gullah, lightning, pickaninny, skillet, smoked Irishman, smoked Yankee, tar pot,

黒人に関する呼称はこのように多数あり、特に蔑視語に分類できるものが多いのは、他者(特に白人)の黒人に対する差別意識の反映以外のなものでもない。黒人の呼称は時代とともに変化したが、それに伴って黒人に対する白人の差別意識と黒人自身が持つ劣等意識も変化したのだろうか。黒人が誇りを取り戻し、自信を持ってアメリカ社会の一員として暮らしていけるようになったのだろうか。黒人が自分たちの存在感を声高に訴えれば訴えるほど、融和・共生とは反対の分離主義的色彩を帯び勝ちである。また、集団としてのアイデンティティにこだわり続けることも分離主義を助長することにつながりかねない。それがほんとうに黒人がめざすべき方向なのだろうか。黒人の呼称が白人側と黒人の内部からの両方の力学で大きく変化してきたのは、アメリカの黒人問題の複雑さと深刻さを証明しているとも考えられる。アメリカの人種問題、特に黒人対白人の関係は今後とも楽観を許さないように思えるが、この点については稿を改めて取り上げたい。

#### 注

- 1) Geneva Smitherman, *TALKIN AND TESTIFYIN, The Language of Black America*, Detroit, Wayne State University Press, 1977, P. 35-41
- 2) black power という言葉を最初に使ったのは、SNCC (学生非暴力調整委員会)の委員長だった Stokely Carmichael で、1966年7月に行われた SNCC 主催の行事においてであった。1967年には、Martin Luther King, Jr. が“Black is beautiful.”というスローガンのポスター・キャンペーンを実施した (William Safire, *SAFIRE'S NEW POLITICAL DICTIONARY*, New York: Random House, 1993, P. 59, 60)。しかし、“Black is beautiful.”という表現そのものは、1966年に Stokely Carmichael がメンフィスでの公民権ラリーで既に使っていた (Nigel Rees, *POLITICALLY CORRECT PHRASE BOOK*, LONDON: BLOOMSBURY, 1993, P. 101)。「アメリカでは『Black is Beautiful-黒は美しい』、アフリカでは『Negritude-アフリカ黒人であることが誇るべき』と言う自覚、自負運動・意識変革が始まった。その運動についてさまざまな誤解があり、それは黒人による『逆差別』ではないかと思う人もいる…。それらの運動の目的は白人を迫害し、侮辱することではなく、むしろそれまで白人支配に隠蔽された黒人の文化史、世界文化への貢献を学んで、黒人であることに対する自己嫌悪を捨て、自己を啓発するという簡単なことである」(ジョン・G・ラッセル『日本人の黒人観』(新評論, 1994) P. 41)
- 3) 荒このみ『黒人のアメリカー誕生の物語』(筑摩書房, 1997) P. 046 によると、「はじめての黒人の雑誌『アングロ・アフリカン・マガジン』の創刊が1850年代だったことは重要だろう。(略)白人のアングロ・アメリカンにたいして、黒人をアングロ・アフリカンと呼んでいる。Arthur M. Schlesinger, Jr., *The DISUNITING OF AMERICA*, New York: W. W. Norton & Company, 1992, P. 88 によると、アフロ・アメリカンは1850年代から断続的に使われていたが、定着することはなかった。また、I. L. アレン, 岩崎裕保監訳『アメリカの蔑視語』(明石書店, 1994) P. 117, 119 には、「Afro-American が初めて記録されたのは1853年で、1880年に本格的に提案されたが、取り上げられず、ある程度の頻度で使用されるまで80年かそれ以上かかった」「1960年代の初めには、Afro-American を

#### アメリカ黒人の呼称について

熱烈に受け入れた者もあったが、まだ一般的ではなかった」とある。

- 4) 本田創造『アメリカ黒人の歴史』(岩波書店, 1991) P. 11  
1990年の国勢調査表の項目は次の通りで、回答は自己申告制である。White, Black or Negro, Indian (Amer.), Eskimo, Aleut, Chinese, Filipino, Hawaiian, Korean, Vietnamese, Japanese, Asian Indian, Samoan, Guamanian, Other API, Other race (明石紀雄・飯野正子「エスニック・アメリカ」(有斐閣, 1997) P. 7, 8)
- 5) 1619年に最初の奴隷20人がオランダ船によってアメリカに運ばれた際のことを, “A Dutch ship sold us twenty Negars...” と記録されている (Nigel Rees, *POLITICALLY CORRECT PHRASE BOOK*, P. 100)。
- 6) E. O. ハッチンソン, 脇浜義明『ゆがんだ黒人イメージとアメリカ社会』(明石書店, 1998) P. 92
- 7) アンドリュエー・ハッカー, 上坂昇訳『アメリカの二つの国民』(明石書店, 1994) P. 76, 77, 106, 107
- 8) *USA TODAY*, 1995/9/1
- 9) 有賀貞編『エスニック状況の現在』(日本国際問題研究所, 1994) P. 95
- 10) シェルビー・スティール, 李隆訳『黒い憂鬱, 90年代アメリカの新しい人間関係』(五月書房, 1994) P. 101
- 11) 『エスニック状況の現在』 P. 95, 96
- 12) 藤本規夫『アメリカの「多文化主義」と「政治的妥当性」について』(広島文教女子大学紀要第30巻, 1955年)
- 13) 『アメリカの蔑視語』 P. 120, 121
- 14) Henry Beard and Christopher Cerf, *THE OFFICIAL POLITICALLY CORRECT DICTIONARY AND HANDBOOK*, New York: Willard Books. 1993, P. 56
- 15) *The American Heritage Dictionary of the English Language Third Edition*: Boston/New York: Houghton Mifflin Company, 1992
- 16) *SAFIRE'S NEW POLITICAL DICTIONARY*, P. 570

#### その他の参考書

- 1) Andrew Hacker, *TWO NATIONS*, New York: Ballantine Books, 1995
- 2) ビル・ブライソン, 木下哲夫訳『アメリカ語ものがたり(1)』(河出書房新社, 1997)
- 3) Clarence Major, *JUBA to JIVE, A Dictionary of African-American Slang*, New York: Penguin Books, 1994
- 4) Shelby Steele, *The Content of Our Character*, New York: Harper Perennial, 1991
- 5) Vincent N. Parrillo, *DIVERSITY IN AMERICA*, Thousand Oaks/California: Pine Forge Press, 1996

—平成10年10月1日 受理—